

重症心身障害児の主体的な余暇活動をめざして 放課後等デイサービスの取り組み

鼓ヶ浦つばさ園 放課後等デイサービス職員一同

1 はじめに

当園放課後等デイサービスは、隣接する総合支援学校に通学している医療的ケアを必要とする、重症心身障害児を主な対象者としています。重症心身障害児は、視力・聴力などの感覚機能や認知機能の低下をはじめ、体の拘縮や緊張・不随意運動により、意思の表出や身体を自由に動かすことが難しく、生活面の殆どに介助を必要とするため往々にして受け身になりがちです。

私たちは、このような重度の障害のある子どもたちが持っている力を発揮し、出来る喜びを感じることで、自ら「やってみたい、楽しい」と思えるような主体的な活動を目指しています。

当園に放課後等デイサービスを開設して8年が経過しました。今後より良い活動につなげられるよう、これまでの取り組みをまとめました。

2 活動内容の見直し

放課後等デイサービスの設立当初は、医療的ケアの依存度が高い子どもが多く、医療的ケアや生活介護に時間を要し、スヌーズレンや音楽鑑賞等、癒しや休息が主な活動でした。

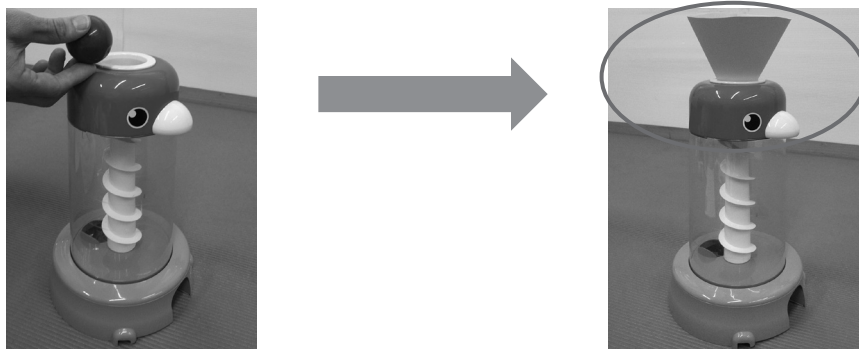
毎日通って来る子ども一人ひとりの個性を知っていく中で、子どもたちが生き生きと喜びを感じられるような活動とはいったいどんなものなのかを、より深く考えるようになりました。

そのプロセスの中で、子どもたちが持っている力を発揮するためには、使う道具や取り組む時の体位に注目する事が重要であると気づき、今では機能訓練担当職員と連携をとりながら個々に合った支援を考えています。

3 道具の工夫

(1) プットインの玩具で遊べるようになったAさん

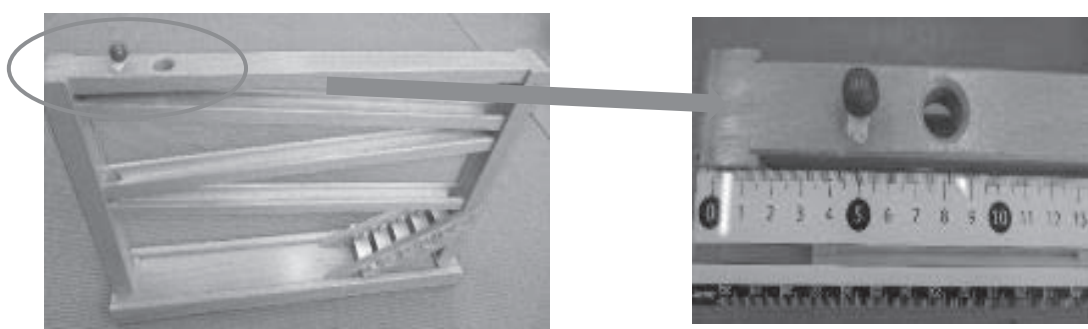
Aさんは、粗大運動障害のため手先の細かな動きが苦手で、玩具を投げたり倒したりして遊び、玩具そのものでの遊び方が身についていませんでした。そこで「一つの玩具を使って楽しむ」ということを目標にあげ、プットインの玩具に挑戦してみました。(写真1)



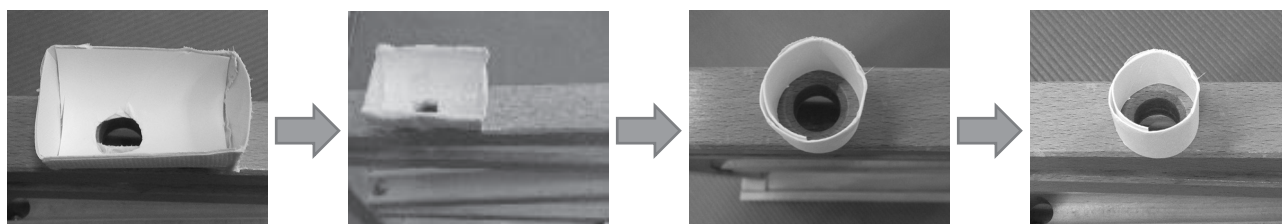
(写真1 くるくるチャイム)

まず、玉の投入口に漏斗状の受け口（以下「漏斗」という。）を付けました（写真①）。また、プットインの玩具に集中出来るように、プットインの玩具のみを目の前に置き、職員がプロンプトをしながら何度も繰り返し遊び方を伝えていきました。慣れてきたころに徐々にプロンプトを外していくと、一人で漏斗に手を伸ばし、ボールを入れようとする姿が見られるようになりました。はじめは漏斗の淵に手が当り、上手く入れることができませんでしたが、偶然入った時にしっかり褒め、その行動を称賛し繰り返し続けるうちに自ら漏斗の中に玉を入れる様子が見られ、成功率が上がったので漏斗を外しました。失敗を繰り返しながらも、偶然入ったときの達成感と褒められる心地よさが次の意欲につながり、継続してこの玩具で遊べるようになりました。

次に、プットインの楽しさを知ったAさんが挑戦したのは、直径1センチメートルの小さな玉です。（写真2）



（写真2 クーゲルバーン）



（写真3 受け口を徐々に小さくしステップアップする）

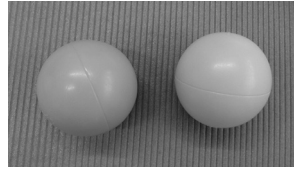
前回と同様、受け口を広くして、徐々に小さくしていきました。（写真3）

受け口を広げた当初は、小さな玉を手のひらで握るように掴んで入れていましたが、投入口の大きさに合わせて、玉を指で掴むことが出来るようになりました。自分から繰り返し遊びはじめ、失敗して転がっていった玉を自分から取ろうとする様子が見られるようになりました。

このように難易度の高い玩具でも、道具に工夫を加えスモールステップで段階を踏むことで、達成感を得ながら挑戦する意欲が継続でき、持っている力をさらに伸ばすことができました。

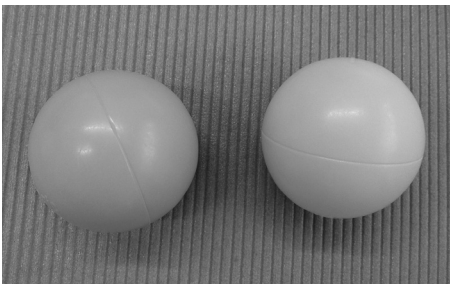
（2） ボールの形に注目したBさんのプットイン

不随意運動のあるBさんは、自分の気になるものに手を伸ばして掴み、掴んだ物を自分の口に持って行き確かめようとする事が出来ます。そのような強みを活かし、Bさんが楽しめるようなプットインの玩具を製作してみました。（写真4）



(写真4 製作したプットインの玩具)

製作した玩具をBさんに試してみたところ、ボールを掴む時の親指の可動域が狭いため、ボールを包み込んで掴む事が出来ず、ボールが滑って落ちてしまい穴に上手入れることが出来ませんでした。そこでボールの代わりに、軽く滑りにくい素材（気泡緩衝材）で形状を筒状にしてみたところ、指4本で握るように掴むことができました。(写真5)



気泡緩衝材を筒状に巻く

(写真5 球から筒状に)

掴むことが出来るようになったことで、やりたい気持ちが生まれ、掴んだ物を懸命に投入口に近づけようとする様子が見られました。しかし投入口に近づけようとする程、緊張が強くなり、不随意運動により腕が前後左右に揺れてしまいます。そこで職員が肘関節を支え腕の動きを安定させることで、投入することができるようになりました。

(3) 描くことができるようになったCさん

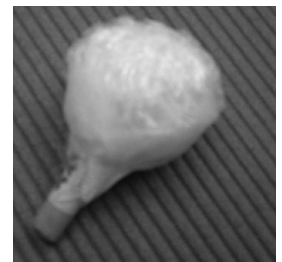
Cさんは、粗大運動障害のため手や指を使う微細運動が苦手で、クレヨンやペンで描くことが出来ませんでした。そこで握る部分を、気泡緩衝材で握りやすい硬さで丸みのある形状に作り、使用してみました。(写真6・7)



(写真6)



(写真7)



握る部分の形状を替えると、ペン先が下を向き、自分で線や点を描くことができました。また、筆圧が弱い部分を補強するために芯が柔らかく描きやすいクレヨンやゲルマーカーを使うと、さらに描き易いことが分かりました。(写真8)



(写真8 ゲルマーカー)

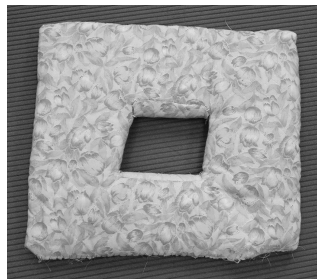
4 体位の工夫

(1) Dさん自身の力でできたボウリング

Dさんは、活動の内容はよく理解していますが、過緊張のうえ、身体の側弯と左右非対称の運動制限がみられ、手を動かそうとすると、本人の意に反して反射的に全身に強い緊張が入ります。

「やりたい」気持ちはあっても出来ない悔しさや、残念な気持ちが表情から読み取れました。そこで機能回復訓練職員に相談し、本人を交えてポジショニングを検討した結果、うつ伏せは身体の緊張が抜け活動の際の最適な姿勢であることを再確認しました。出来るだけ脱力した状態で力が発揮できるように、以下の4点に配慮しながらボウリングの姿勢を考えました。

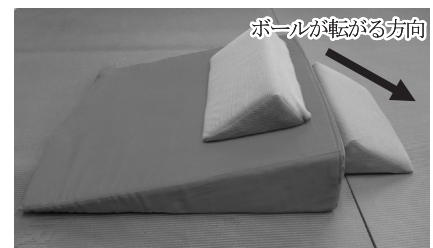
- ① わずかな手の動きでボールが転がるよう、傾斜を利用しボールを転がす。
- ② 身体とマットの空間をクッション等で埋め体勢を安定させる。
- ③ 緊張で顔の向きが変わってしまうため、本人からボールの動きが確認出来るようにする。
- ④ 腹部のITBポンプ、胃ろう部を圧迫しないよう保護クッション等(写真9)を利用する。



(写真9 胃ろう部保護クッション)

その日の本人の緊張の程度に合わせ、うつ伏せマットの形状を写真⑪から写真⑫のように変えて試してみました。

比較的緊張の弱い時は三角マットとナーセントパットを使用することで低めのうつ伏せ姿勢にしました(写真10)



(写真10)

緊張が強めな時には、ソフトブロックとナーセントパットスワローを組み合わせ、下肢を垂直に下ろして膝を床につけ体位の安定を図りました。(写真11)



(写真11)

ビーズクッションは身体に合わせて形状が変化しリックスし易く、腕や顔の運動制限も少ないことが分かりました。
(写真12)



(写真12)

上の写真のように様々なうつ伏せマットを使用し本人の手の動きがスムーズに引き出せるよう、脇や腹部の空間に枕やクッションを入れて上肢の安定を図りました。本人が、動かしたい気持ちがあるのに、なかなか上肢の動きが始まらない時には、職員が動きの基部となる肘関節を支え、出来るだけ本人の力が引き出せるように支援します。動くまでかなりの時間を要しますが、ボールが動きピンが倒れると「できた！」という満足そうな笑顔になります。(写真13)



(写真13)

(2) Eさんの活動に合わせた体位

Eさんは、首や座位の保持ができず、常に筋緊張と不随意運動があり、手を動かそうとすると、首が反り返ったり、姿勢が不安定になりがちです。機能回復訓練担当職員と相談し、活動に合わせて体位のバリエーションを広げるよう支援してみました。

① ボウリング

ビーズクッションにうつ伏せになり、両手でボールを保持し放します。(写真14)



(写真14)

② 楽器遊び

抱っこで座位になり、肘関節を支え、楽器に視線を合わせ楽器に触れて音を出します。(写真15)



(写真15)

③ 感触あそび

うつ伏せになり、胸や脇にスポンジを入れ、上肢を動きやすくします。様々なものを触って感触を確かめます。(写真16)



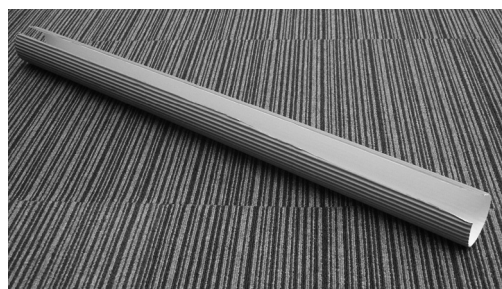
(写真16)

様々な体位で活動を広げることで、何事にも一生懸命に取り組みたいDさんの意欲に働きかけ、出来たときは一瞬キラッとした笑顔で嬉しい気持ちを表現しました。しかし、日によっては活動中で疲れた表情があったり、涙が出たりすることもあり、本人の気持ちにしっかりと向き合いながら活動を進めていくことが大切だと感じています。

5 その他のレクリエーション

(1) 大型風船を利用したピン倒し

大型風船を落下させて軽い素材の片段ボールのピンを倒します。わずかな手の動きで風船を落下させることができ、倒れた様子が視覚的にも分かりやすいゲームです。(写真17・18)



(写真17 簡単に倒れる片段ボール)

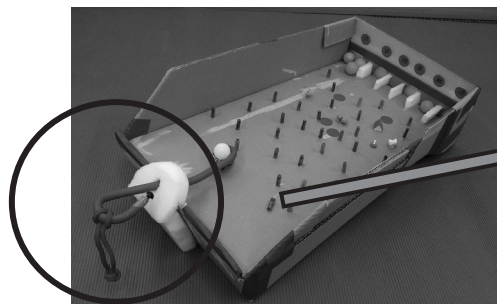


(写真18 ピン倒しの様子)

(2) 手作りのコロコロゲーム

子どもたちの力で出来る傾斜を利用したゲームを作成しました。

僅かな力でもレバーに触れるとピンポン玉が落下し、障害物に当たりながらゆっくり落ちていきます。ゴールには点数の表示をつけました。レバー操作ができない場合は、取り付け紐に手をひっかけて動かすことができるよう改良しました。(写真19・20)



(写真19)



(写真20)

6 その他の取り組み

スピード感を体感できる感覚運動遊びは子どもたちが好きな活動です。一畳分のスペースの枠にボールプールを作り、その上にボードを置き子どもを乗せて揺らします。(写真 2 1)



(写真 2 1)

より広いスペースでダイナミックな動きが体感出来るようボールの代わりに直径 20 センチの筒を並べてみました。

(写真 2 2)

乗った時の安定感がありスピードもアップしたため感覚刺激を受けやすく「もう一度やってみたい？」の問いかけに満面の笑顔が返ってきます。



(写真 2 2)

7 考察

これまで子どもたちの「できた！」を実現するために、子どもたちにとって何が楽しめる事なのかを考えながら、道具や体位を整えてきました。「できなかった」ことで、悲しい、悔しい表情をみせてくれた子どもたちが、できた喜びを実感できるよう職員が道具の製作や改良を行い、新しい活動を考えてきました。

子どもたちの主体的な活動を実現するためには、道具や体位を整えるだけでなく、日々の活動の中で、本人に尋ねて反応を確認するコミュニケーションの積み重ねや、子どもたちの表情や体の動きをよく観察し「活動を楽しめているか」、「やってみたい事なのか」という感情表現もしっかり受け取らなくてはなりません。身体全体を震わせて嫌な気持ちを表したり、表情が乏しかったり、目つきがぼんやりしていたり、身体全体で表出する感情の変化を見逃さないよう複数の職員で観察する事が大切だと感じています。一人ひとりの違った表現をしっかり受け取り、活動が職員の自己満足にならないよう、職員同士での話し合いが必要です。

8 おわりに

日々の活動の中で、子どもたち自身が味覚、聴覚、視覚、触覚、嗅覚で認知することは「見ようとする」「触ろうとする」「耳を傾けようとする」「匂いを嗅ぐということ」等、「自分の感覚を使う」という意味を持ち、成長に欠かせない経験の積み重ねです。そのため放課後等デイサービスでは様々な素材に触れたり、散歩で風を感じたり、季節の花に触れ匂いを嗅ぐ等、五感に働きかけ感性を育む活動も大事にしています。

これからも子どもたちの感性を育みながら、自身が主体的に自己決定・自己選択ができるよう促し、持っている力を引き出しながら楽しい活動の時間を過ごすことができるように、支援を模索し研鑽していきたいと思えます。

<参考文献>

佐藤和美 立花優子 小浜幹子 「感覚統合を生かして楽しく学習」

かもがわ出版 (2010)

三木裕和・原田文孝「重症児の授業づくり」(株) クリエイツかもがわ (2009)

特別支援教育簡単手作り教材BOOK (株) クリエイツかもがわ (2016)